

阿波の舞台と中国の神廟舞台

京都大学人間・環境学研究所 赤松紀彦

昨年十二月三日、佐藤さんをはじめ、会員の方々のご案内で、犬飼、百合、拝宮、坂州の舞台を見学させていただきました。私自身は、中国の伝統演劇を研究テーマとしており、今回は、私どもの大学に招聘外国人学者として滞在されている、山西師範大学戯曲文物研究所の車文明所長と曹飛先生に、日本の農村舞台をご覧いただくというのが目的でした。中国でも、我が国の神社にあたる神廟には、やはり奉納芝居のための数多くの舞台が残されています。最も古いものでは十三世紀に遡るものがなお現存しているのですが、お二人の先生は、こうした方面の専門家です。

阿波の人形浄瑠璃舞台のほかにも、兵庫県の山間部に残る農村歌舞伎の舞台、奈良春日若宮神社の芝舞台、あるいは関西一円の神社の能舞台など、十一月以来精力的に調査、見学されてきました。何よりも興味深かったのは、本殿に対しての舞台の位置という問題でした。本来は、神さまに見ていただくものですが、本殿と向かい合うように作られていたものが、本来の意義が薄れて、人に見えるためのお芝居となるにつれて、舞台の位置や方向が変わっていったという現象です。同じような現象は、中国でも見られます。

特に、坂州だったかで、太夫座から見て斜め正面に本殿が位置するように舞台が造られているという説明をお聞きした

時、なるほどと思いました。中国の場合は、位置を斜めにずらすという例はないようです。多くの場合は、本来我が国の神社の舞殿（拜殿）と同じく、本殿のすぐ前に作られていたものを、門にあたる場所に舞台を作り、下部を通路とすることによって、多くの観客が見られるようにしてあります。ただしこの形だと、神さまにお尻をむけることになるのですが。貴重なお時間をさいいて、わざわざご案内していただいた、佐藤さんをはじめとする会員の方々に、この場を借りて改めてお礼申し上げます。



中国浙江省烏鎮の修真観(道教寺院)の舞台

この度、第三回拝宮農村舞台公演にて舞台美術を担当させていただきました。最初にお話をいただいた時は何の違和感もなく素直に受け入れる事が出来ました。早速に拝宮に向かいました。丁度一年前に公演を見に訪れた事があり、白人神社と農村舞台を囲むすばらしい自然に胸をうたれ感動した記憶がありました。テーマは樋口一葉作「十三夜」、早速に再度本を読み内容をより深く知る事にしました。和紙作家の中村先生との打ち合わせで、素材は「竹と和紙」で構成する事で一致しました。井本会長さんはじめ地元の人に早速に青竹の手配をお願いすると、快く返事をいただきスムーズに準備に入る事が出来ました。

公演前日の制作となり、その日はとても寒く風も強く、スタッフ一同ふるえながらの制作でした。舞台背景の空間はどうしても生かしたいと考えシンプルに仕上げる事にしました。裏山を駆けめぐりススキ、野菊と思つたとおりのお花を収集する事が出来ました。また、舞台裏の谷川にかかる橋には割竹でアプローチを作り、訪れる人々が樋口一葉の世界に心酔していただけたらと考え、寒空の中奮闘しました。当日、人間国宝の鶴賀先生が来られ、少し驚かれた様子でアプローチの入口で井本会長さんと握手をされている姿がとても印象的で感慨深いものがありました。すばらしい自然に助けられた今回の舞



平成17年10月23日(日) 第3回拝宮農村舞台公演

樋口一葉の世界に魅せられて

草月流 出村丹雅草

舞台美術は、竹の造形とそして人々が行き交う様子が「花」となったように感じました。今回私たちにとっては貴重な体験をする事が出来、関係者の皆様に感謝しているところでございます。今後も貴重な阿波の文化に関わっていただければと考えています。またいつか「竹と椿」を使つての舞台美術が出来ればと夢を見ています。

見た！徳島で最大、最古、廃村の舞台

日本経済新聞社徳島支局長 鈴木康浩

二〇〇五年十二月十一日、みんなで徳島で最大、最古、廃村というそれぞれ特徴を持つ舞台の調査にでかけた。最大は旧相生町の西納(にしの)の舞台、最古は旧木頭村の北川の舞台、廃村は旧上那賀町の徳ヶ谷の舞台だ。調査日は例年にならない寒波でかなり寒かったが、足を運んだ価値は十分にあった。

朝九時半にアステイに集合。車に分乗し、まずは西納に向かった。西納では那賀町の総務課長らが合流した。町としても貴重な文化財になりうる舞台をしつかりみておきたい。そんな思いが伝わってきた。舞台の大きさは七・五間×四・五間もあり、横幅も広いが、奥行きが他の舞台と比べ一段と深い。舞台左手の内部には映写機があり、かつて「鞍馬天狗」などを観て楽しんだという昔話の実は昨日のことではないかと思えてくる。

西納の舞台のある八面(やづら)神社は実は二つあり、ここから上流にある八面神社が元。大昔の洪水で本尊が今の場所に流れ着いたので今の神社を建立した。余談だが、元の神社には竹の節をかたどった灯籠(とうろう)がある。古事記の国生みの神、イザナギ・イザナミの伝説が宿る神社で、西納は古事記の舞台になった場所だが、話すとき長くなるので次回の機会にしよう。さて、次は徳ヶ谷の舞台に向かった。かつての木こりの村で、長安口ダムの湖のほとりから山道を小一時間ほど歩いた

ところにある。結構きつい登りで、寒さはどこへやら、みんな結構汗をかいた。村に着いて、驚くのは家々に郵便ポストがあることだ。昔の郵便配達はこちらまできたのかと苦労がしのばれる。徳ヶ谷の舞台はこうしたかしいでこけむした廃村の奥にある。舞台左手の扉にある詩文は村を最後にした人の作とみられ、筆者は最初に訪れたときひどく感動し、作者を捜したが、すでに故人となっていた。息子さんが徳島市八多にお住まいで一度連絡をとったことがある。舞台のすばらしさは境内の手入れが行き届き、舞台がきちんと修復されていることだ。廃村の中の美しい舞台は村の出身者が「自分たちの父母が生まれ育ったところだから」と交代で清掃に訪れ、年一回祭りを催していることで保たれている。これこそ農村舞台の原点ではないかと思う。願わくば青年座が心のこもった手づくりの復活公演をできないか、と筆者は思う。木偶をかついで山道を歩いて公演するのが農村舞台だ。最後の北川の舞台は逆に寒かった。木頭と木沢の気温差は常に三、四度ある。ちなみに先日寒い日に再び訪れたとき、気温は木頭の蛇石神社近くでマイナス八度、北川でマイナス四度、木沢でマイナス一度、徳島市内でプラス三度だった。北川の庄巻は舞台の裏の木壁に無数に墨書された公演記録だ。天保、寛政など江戸後期の記録があり、淡路の人形座が



西納の舞台



徳ヶ谷の舞台



北川の舞台